

【設立記念シンポジウム 国際人井上円了—その思想と行動—】

世界哲学の交差点
—井上円了における理論哲学と実践哲学—

ライナ・シュルツァ (Rainer SCHULZER)

Abstract:

The presentation on the occasion of the 125th anniversary of Toyo University in 2012 pointed to the significance of INOUE Enryō's 井上円了 writings as a historical crossroads of world philosophy. Two ideas of philosophy were contrasted: what the early Enryō called "Genuine Philosophy" 純正哲学 was characterized by the notion of philosophy as the theory of the system of sciences and of philosophy as metaphysics aiming at ultimate truth. In contrast to such a theoretical philosophy of Aristotelian provenance, a distinct apprehension of philosophy as anthropology, an inquiry into the "Human Path" 人道, or as humanism can also be found in Enryō, starting from his 1899 work, *A Quick Primer in Philosophy* 『哲学早わかり』. Enryō recognized the common existential starting point that such a humanistic philosophy had in the figures of Socrates and Confucius. It is argued that Enryō's ultimate reasons for the foundation of Toyo University were practical ones and hence must be sought for in his practical philosophy.

二つの哲学の捉え方を区別することによって、世界哲学の交差点としての、井上円了哲学著作の意義を指摘する。初期の井上円了の「純正哲学」は、「学問体系を考える科学理論」と「究極の真理を目指す形而上学」という性質を持つ

ており、アリストテレス的な理論哲学に相当する。一方、1899年の『哲学早わかり』からは、「人間の学」としての哲学、「人道」を考える思想、「人生を向上する」学問といった哲学の捉え方が見られる。このような実践哲学には、ソクラテスと孔子に共通する哲学の実存的な出発点が見つけられる。東洋大学 125 周年の際、学祖井上円了の哲学館を創立する目的を確認するために、その理論哲学よりも、その実践的な思想を検討しなければならないと指摘する。

世界哲学の交差点

西周、福澤諭吉などの明治第一世代の学者は、洋書を翻訳、あるいは意識しながら、新しい学問的な語彙を形作りました。この近代のアカデミックな用語は、明治第二世代の代表人物である井上哲次郎によって、『哲学字彙』というグロッサリーで、ある意味で規範的にまとめられました。このように初期東京大学で定着してきた、新しい人文学のメタ言語、つまり理論と実践、哲学と宗教、科学と迷信、倫理と幸福、個人と自由、現象と経験、主体と客体、文化と文明、社会と国家、論理と真理、概念と定義などというパラダイム的な概念は、後に近代の中国語と韓国語にも使用されるようになり、現代、東アジア漢字文化圏の諸大学で行われる人文学の共通用語になりました。

明治時代にみられる言語の近代化は、いうまでもなく大変複雑な過程です。この過程をより詳細に把握するために、概念史というアプローチは、とても有意義であると思っています。本日、すでにブルチャー先生に「主体」の概念史についてとても興味深い発表を聞きました。さらに、東京大学の島蘭進先生やその弟子、磯前順一先生によって、「宗教」の概念史が詳しく研究されてきました。「哲学」という造語についてはもちろん、そして「倫理」・「社会」・「自由」などの言葉についても既にいろいろ研究があります。私は博士論文に「真理」の概念を少し研究してみました。他の「理」の熟語については、ブルチャー先生のこれから発表される研究にも期待できます。そして、明治時代の概念史研究のためには、東洋大学の哲学者である柴田隆行先生によって編集された『哲学・思想翻訳語事典』を重要なツールとしてお勧めしたいと思います。

さて、本日は、こういう研究に貢献するのではなくて、明治時代における日本語の近代化の一つの歴史的な解釈に基づいてお話ししてみたいと思います。さきほど

「パラダイムの」と「メタ言語」という言葉を使いました。明治時代に定着してきた新しい人文学の諸用語を大学という研究施設と併せて考察すべであると思います。そうすると、この幾つかの新しい抽象的な概念をアカデミックな研究のツール、あるいは学問的な捉え方として解釈できます。この用語を以て、諸人文学がそれぞれの研究対象を分析したり、再構成したりできます。ある程度社会から離れている近代の研究大学では、メタレベルのような立場から今までの歴史・文化・思想などが把握されます。この意味で明治の近代化した日本語を、新しいパラダイム的な概念構造、あるいは新しいアカデミックなメタ言語として機能してきたと理解できると思います。

井上円了と井上哲次郎という明治の第二世代の代表的な学者は、二人とも周知のように初期東京大学で教育を受けました。二人の井上の著作において、近代の人文学の諸言説を初めてほぼ完成した状態で見ることができます。二人の井上の幾つかの分野にわたる幅広い著作活動は、折衷主義として批判されてきました。二人が哲学体系を作ることに成功したかどうかという問題は別にして、近代人文学の形成過程を背景にすると、折衷主義と違う評価も可能になると思います。二人の井上の著作の中において、印度・ヨーロッパ・東アジアという三つの文化圏の倫理・宗教・形而上学が同じ学問的なメタ言語で把握され、新しい概念構造の中に仲介されたという事実を認めることができます。このように開かれた新しい言説空間の中では、三つの文化圏の思想を比較したり、議論したり、体系化したりできるようになりました。このように考えると、折衷主義として批判するよりも、この新しくできた枠組みこそに実績を認めて、興味深い歴史的段階として考察するほうが有意義であると思います。明治の第二世代に形作られた近代的な人文学の言説は、世界哲学の交差点のように見ることができます。井上円了が孔子・ブッダ・カント・ソクラテスという四人の聖人を選んで、四聖として祀ったことは、この初期東京大学で新しくできたグローバルな視野を表すものであると思います。

「世界哲学の交差点」という表現が内容的にも具体化するために、発表の後半には、『哲学館開設旨趣』と『哲学早わかり』というテキストを中心に、井上円了にみられる二つの哲学の捉え方を抽出して、対照してみたいと思います。

井上円了における理論哲学

『哲学館開設旨趣』という東洋大学の根本となった文書には、若い井上円了の代表的な哲学観がみられます。「それ哲学は百般事物につきて、その原理を探りその原則を定むるの学問にして、上は政治法律より下はもって百科の理工芸におよび、みなその原理原則を斯学に資取せざるはなし。すなわち、哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称する」。この哲学観は、ほぼ純粋にアリストテレスの理論哲学に相当するといえると思います。アリストテレス的な理論哲学は、当時世界のトップの哲学者としてみられた英国のスペンサーに代表されていました。井上円了はスペンサーの『第一原理』を東京大学の時代に外山正一のもとで詳しく学びました。このような理論哲学の一つの側面は、学問体系を考える科学理論です。アリストテレスの『形而上学』に見られるように、哲学は、原理に基づいて世界をいくつかの存在論的な領域に分けて、それぞれの領域に相当する学問を求めます。数字を対象とする学問は数学、生き物を対象とする学問は生物学、心を対象とする学問は心理学、政治を対象とする学問は政治学云々。

このように考えられた学問体系は、近代の研究大学の基本的な構造になりました。学問体系による研究分野は、大学組織のレベルにおいて学部と学科という分け方に相当します。近代の研究大学は、実は施設となったアリストテレス哲学であると言っても言い過ぎではないのです。この科学理論としての哲学観が東洋大学の創立文書に明確に表されているということは、大きな財産だと思っております。さらに、存在論に基づく科学体系を考える哲学の仕事を、「中央政府」の機能に比べることは、井上円了の独創的な比喩でもあるようです。

「哲学は、学問世界の中央政府にして万学を統轄する」学問であると『哲学館開設旨趣』に書いてあります。この引用に書いてある「統轄」は、二つの意味で取ることができると思います。コンテキストは、政治的な比喩であるので、コントロール、あるいは監督という意味が何ととっても目立ちますが、井上円了における別の用例をみると（2：36-37）、現代日本語で「包括」の「括」で書いている「統括」としても、つまり「統合する」、あるいは「まとめる」という意味の読み方も可能であると思います。このように解釈すると、哲学には科学理論以外に諸学問の知識を統一する、または統合するという役割もあると『哲学館開設旨趣』から理解できます。この統合する機能を哲学がどうやって果たすかということ、哲学は、他の学問と違っ

て、特別な存在論的な領域を対象とするのではなくて、存在そのものを考えたり、あるいは宇宙の全体について思索したりします。この哲学のイメージは、アリストテレスの言う「第一哲学」に相当するし、井上円了の言う「純正哲学」と同じでもあり、一般的に「形而上学」と呼ばれているものでしょう。

科学理論と形而上学といったような、とても影響の強い哲学観は、遅くとも 19 世紀から、西洋でも、日本でも、専門ではない方々には典型的な哲学としてみられるようになってきました。

井上円了における実践哲学

本日、既に竹村学長がご講演におっしゃった通りに、後期の井上円了は、純粋な形而上学よりも活動や実践を自分の思想の中で重視しました。この井上円了の実践的な視野は、すくなくとも枠組みとして『哲学館開設旨趣』にも入っていると思います。文書の最初のところと、終わりのところにも、哲学館は、「世運の開明」、あるいは「世運の開進」の「補助」になるようにという井上円了の望みが表されています。「世運の開明」と「世運の開進」というのは、世界（もしかしたら世間）の文明開化、あるいは人間文明の進歩として解釈できるでしょう。

さて、究極の真理を追求する理論哲学のような高等な学問が、如何にして人間の文明に貢献できるのか、という問題は直接に明らかではないでしょう。真理が人間のためにどのような価値があるかというのは、真理そのものために真理を考える理論哲学の枠組みの中で解決できない問題であるからです。真理というのは、記述的な妥当性ということであるので、「真理の価値」ということは、理論哲学を越える話です。同じように、井上円了が純正哲学、所謂純粋な形而上学を修める場所として学校を創設しましたが、学校そのものに何の目的があるか、何の機能を果たすべきかというのは、理論的ではなくて、実践的な問題です。言い換えてみると、近代的大学という、研究そのものために研究を行う施設が、人間の文明のために何の価値があるのかということとは、実践哲学の枠組みの中で議論しなければならないテーマなのです。

学祖が 125 年前に実践的な理由を以て哲学館を創設したわけですから、学校の目的について知りたいならば、何といっても創設者の意図を検討しなければなりません。

ん。1899年の『哲学早わかり』という哲学入門講義を読むと、なぜ井上円了が哲学を日本、あるいは人間文明のために必要としたのかももう少し具体的に理解することができます。『哲学早わかり』では、上で話した理論哲学の哲学観も明確に表されていますが、一方、後期の井上円了の、道徳・実践・活動などを重視する思想の芽生え、あるいはその哲学的な基礎も見つけることができます。この講義で井上円了は、「世間の実用に最も遠い無用の学問」という一般的な哲学のイメージに反対しました。

このために哲学を「人間の学」として定義しました。「哲学は宇宙万有の中にて人間の人間たる特性〔…〕研究する」と書いています。さらに、「人間と生まれる以上は、人間の目的を知らずして世を渡することは最も不都合と考えます。」「その目的を研究することは物理学でもできず、天文学でもできず、ぜひ哲学によらなければなりません。何日間顕微鏡をのぞいていても、そのうちより決して人の道の現れてくる道理なく、また何ヶ月間望遠鏡をうかがっていても、決してそのうちに人の目的が分かるはずはありません。」井上円了によると、人間とは何か、人間の目的と何か、が分からないと、適切な人生、あるいは人間らしい生活を過ごすことができないし、健康な人間文明を発展させることもできません。それで井上円了が、「いやしくも人間に生まれたる以上は、〔人間の学である〕哲学を修むるは必然の義務と心得てよろしい。」という面白い結論もしました。

続いて井上円了は論語を引用して次のように話しました。「孔子も朝に道を聞いて夕に死すとも可なりとまで申され、その道とは人間の目的のことであります。」明治時代の世界哲学の交差点に立って、比較哲学という分野も開拓した井上円了は、論語だけではなくて、プラトンの描いたソクラテスにも哲学が人道思想、あるいはヒューマニズムとして生まれたことを、よく理解していました。ソクラテスについて次のような適確な記述が書いてあります。ソクラテスは、古代ヨーロッパの「人間哲学の時代」の端緒に立って、「前世紀の万有哲学を一転して、哲学の問題を人間の上に移し、もっぱら倫理および教育の道理を講ずることになり」と話しました。井上円了の指摘した通り、孔子とソクラテス、あるいは論語とプラトンの著作には、人生から始まる、同じような哲学の実存的な出発点をみることができます。

終わりに

さて、井上円了はなぜ純正哲学(形而上学)を修める学校を創設したのでしょうか。この質問に対しても、『哲学早わかり』に明確な回答が書いてあります。純正哲学の個人にとっての利益は、四つの点が挙げられています。「第一に知力を練磨すること、第二に思想を遠大にすること、第三に情操を高尚にすること、第四に人心を安定すること」。第一と第二の点は、そのままで十分明らかであると思われますが、第三と第四の純正哲学の利点は、必ずしもそうではないでしょう。これを更に説明するために、人間の心の在り方について話さなければなりません。つまり、理性を洗練することはどのように情操に影響を与えるのか、究極な真理を思索することは本当に安心させるのか、というような問いは、人間学的な枠組みの中でしか答えることができないでしょう。更に広めていってみると、哲学に基づく教育だけではなく、全ての教育、倫理、政治という実践哲学の根本的なテーマにおいても、それらの価値とそれらの理想的な形を研究することから、「人間とは何か」という根本問題を切り離すことはできません。この意味で井上円了が指摘したように、人間学は、実践哲学の基礎的役割があると認めることができると私は思っております。

(シュルツァ、ライナ・井上円了記念学術センター客員研究員)